

(1) 子供たちには無縁に

先日の NHK 番組クローズアップ現代で原発事故で被災した福島県民に対する被曝調査の様子が放送されていました。その中で、内部被曝に関して専門家は「生涯被曝限度の 100mm シーベルトに大きく離れているから、普通の人の 20 倍の値が計測されていても大丈夫です」と説明していましたが、被験者は今後の長い生涯の間に更に被害を受ける状況を怖れて不安感一杯の疑問を呈していました。確かに被曝の事実と向き合った人でなければ怖さは判らないでしょうし、彼の不安感はいくら専門家が数字を並べたてて安全と強調しようとも払拭されることはないかもしれません。

そしてセシウムによる肉牛汚染問題が表面化してから 1ヶ月近くなり、それぞれの立場での対応も明らかになってきましたが、消費の落ち込みは、なかなか回復するまでにはならず、輸入肉の売り場も含めて低調なまのようです。また、間もなく収穫期を迎えるコメに関して農水省は収穫前後 2 回にわたっての放射能検査を実施すべく動き始めました。日本人の主食であるだけに結果如何がどれほどの影響を与えるのか、計り知れないものがあるだけに万全を期して欲しいものです。たとえ基準値以下であっても放射線物質が検出されれば、健康被害がないといわれても心の片隅では消し難い不安感が残ってしまいます。

この大震災を契機として放射線汚染と共存することを強いられています。66 年前の広島・長崎のピカ・ドン以来の放射能騒ぎであり、あの頃とは雲泥の差で数多くの情報が素早く手許に入ってきますが、未だに原発事故による汚染の全容把握も出来ていないまのようですし、今後も完全を求めることは無理なことでしょう。とすれば、我々はこれからも多かれ少なかれ、程度の差はあってもこうした話題と向き合っていかなければならないのかもしれないかもしれません。少子高齢化がいわれる現実の中で、大人達は、やむを得ないと言いながら、次世代に向う子供達には汚染された食と無縁のことにしてやらなければならないと思います。

(鈴木重雄 筆)